

群衆の雜踏する所に用ゐて奇効を奏したりと云

ふ

予の法は即日より何人も之を實行する事を得て價亦極めて廉なり

(右一篇は婦人衛生雜誌に載せられたるもの有益なりと思ふが故に轉載せり)

英語でレディー(貴婦人)と云ふと上流の人のことで著
 外に重いものを持たない人の様に思ふて居る人が
 随分多い。甚だしく虚榮心の婦人は殊に臺所などに顔
 を出さないのが貴婦人の貴婦人たる所の様に考へて御
 座る心得違ひもあるが一体此レディーと云ふ字の語源
 は如何と調べて見ると錦繡を纏ひ綺羅を飾る人を云ふ
 のでなくて爐邊に立ちて麵麴焼きをする女の事であ
 る。即ち麵麴焼きの出来ぬ女はレディーではないので
 ある。して見れば婦人にして厨房を自らせざるものは
 レディー即ち貴婦人と云ふことは出来ない譯だ。

アメリカの寺小屋

朝露生

三十二

わけもわからずに聲はりわけて、讀むは實語經に
 童子經、商賣往來に庭訓今川などと、手習は義經
 の腰越狀、算盤は塵功記、かくて一日の科業をす
 ましたのは、吾等の前代の學校、即ち寺小屋であ
 つたとき、ました。思ひさや、文明を街んこの國
 にて、長髮短袖のお師匠様となり、花籃の上に教
 壇をしつらひ、ギアスの火影に寺小屋を開くこと
 ならんとは、いでやその滑稽じみたる村夫子の
 舞臺を廻して御目にかけてせう。
 わが友と二人にて經營して居る教會、大森博士に
 賞賛せられさうな低き建もの、大地震を豫想して
 の借家ぞと云ひたひが、實はあるべきものゝわら
 なくにわりなくもこの塙末にひつこんで居るの
 です、友の斡旋にてこの一二年來會員も多くなり
 どうやらこうやら維持の方法も立つて居るとのこ
 と、桑港の下女は玉の輿ならぬ漁船に乗て、こ
 の、家に縁づきましたのは六月十日のたそがれ時

でございしました。
 日曜ごとの説教と家庭訪問などのうちに、冥加に
 余つた天職と喜ばしく思ふことのないでもありま
 せぬが、それは佛弟子となつて見ねばわからぬこと、
 役者の自信や抱負は御見物に一々披露するにも及
 びますまい。
 日本人兒童を集めて國語と日本歴史日本地理など
 を教ゆるは、わが寺小屋の第一部であります。生
 徒といふは朝九時より午後三時まで白人の小學校
 に通ふて居るのでありますから、こゝへは三時半
 ごろ参ります、男女合せて二十名足らず、何れも
 この國にて生れたるあるは布哇にてあるは英領
 イクトリヤにて黒と瞳を開きたる子たちでござい
 ます、國語讀本の講義をするに英語を用ゐねばか
 の人だちに理解むづかしく、備忘録にするす横文
 字は、教ゆるものよりもはるか巧みにて、髪黒さ
 ヤンキーに日本語を教授する心地、まことに奇妙
 なる感じをいたします。
 長時間の押賣をして彼の人だちのいたいなき腦
 を傷つけんよりはと一時間より長くは學ばしめぬ

やうにしてゐます。
 智識の程度はこの國ぶりの小學校だけすゝんでゐ
 るのでありますから、さまでの困難もなく、おさ
 ん時代のチキンローストをつくるよりも、面倒が
 ないのです。
 されどわが國ぶりの種一粒、心々の底に植えつけ
 大和なでし子うるはしきが上にもうるはしく、異
 國の野に咲きほこれかしの志、力足らぬ身には
 寧ろ危懼の情交々起るゝみにて、ゆく末のことま
 ことに心ぐるしく、いつの日その幾分かを果すこ
 とかため息をついて居るばかりです。
 命運のさだめなればいたしかたなきも断ちがたき
 恩愛を母國の教へ子とたちて、流離落魄一年あま
 り、是にかゝる不思議なる教へ子を得んとは思ひ
 かけざりしところ、思はぬ人へのぞまれて、結納
 をすましてのちも、初恋の花の香わすれがたくて、
 かへらぬ昔を偲ぶといふ小説の筋にも似たること
 よとつぶややし折もございしました。
 しかし母國の佛苗よりは通信絶へず、相見ても相
 たることなしがたくと、この想、かの想、太平

洋の隔てもなく通ひ居ることでありませうから、わが花園は新世界にも出来たることゝあきらめて愛の眞清水、この佛苗だちにも惜しげなくそそぎませう。

忠君愛國といふこと、米の飯の頂さ慣れて、勿体ないが珍らしからぬことのやうに思ふたこともありませんでしたが、遠く遊びていよゝ君恩の重さを感じ母國と云へる觀念いと一切になりませう。

は、争はれぬ事實でございませう。ましてや出来ぬまでも國民性の陶冶をつとめんとて、この子だちの老友となりしもの、雄々しき希望は涌くが如くでございませう。

夫婦を家庭の基礎として、個人を中心に發展をはかるはこの國ぶりのやうであります。父子を一家の君臣として、利他的献身的に孝悌をつくりて居る絶東君子國の倫常は、よしや世界の黄金を悉くさげ來れりとして、いかに賣ることは出来ませうか、個人主義は佛法で云ふと羅漢小乗の卑見でございませう。自分の迷を去りて解脱を得たら宜しいと思ふて居るらしい、忠孝の道は菩薩大乘の

見地です。自分とはかくさもあらばあれ、わが君幸多かれわが親幸多かれとの尊き願、詩としてはこれより美しきはなく、哲學としてはこれより高遠なるはなく、宗教としては直にその極致を示して居るのでございませう。オルガンをかんで、教へ子だちと君が代を合奏するとき、百千の經卷をよみ畢つたやうな想いたします。

子だちの父母は、金ほしさにこの苦闘國にきて居るのでありますから、いつも陣中にかりねして居るやうな有様、家庭の訓練などともとても出来るわけがないのです。共に遊ぶは碧眼の腕白兒童ばかり、さける日本語は余りにも元氣よき罵倒流、黙禮することだに知らぬ子がございませう。

信者の家庭訪問せるとき、子だちのホームには特に想をよせて觀察したのであります。情けないと云ふてよきか悔しきと云ふてよきか、まことに金が仇の浮世でございませう。

四層五層の樓閣には、金だにあると黑人でも猶太人でも大威張りして住居して居りますが、金のなき同胞は多く最下層のベースメントに巢をかまへて

居るのです。

ある子のホームを訪れましたが小さけれど窓ありてさまで暗からぬベースメント、母なる人は白人と労働のかけ合ひ最中でございました。父は終日そとに働き母はその日その日の労働口を求めて、一週二日と家にとまらぬ晝はないとの話、その子は父母のかへるまでは戸外にのみ遊んで居るのでございます。

またある子の父母は、とある廣地に花鳥をもつて居るので、父は終日水を灌ぎ母は終日枝ぶりを直し、子はその花の中にありて遊びては眠り眠りては遊ぶ外、何のなぐさみともなく、とびくる蝶々を友とするばかり、まことに可愛さうに思ふたのでございました。

同胞のうちには商店をいたし居るもあり職工を澤山使ひて事業をなして居るもあり、まんざらベースメント連のみではありませぬ。されど戦大なれば大なるほど、参謀官も大將も寸暇なく活動せねばならじ、家庭の穩健なる感化力はどのみち乏しきことを免れぬとは、子たちのためにまことに

悲しむべきことでございます。托兒場の必用を吾も人も感じて居るのでありますが、まだよき機会がないと見えて、出来て居りませぬ。

よしや一日一時間のみのつどひにもせよ、わがまごゝろの子だちにうつらぬことあるべしや、吾はあらんかざりの親情をわが幼き友どちに傾くべしと御佛に誓ひました。

第二部は夜學校です。初等英語の研究があるのでありまして、程度はそれぞれ別であるために、わが友と、外一人と、三人にて手わけして教へてゐます、終日労働して、夜間ダイヤモンドよりも尊きタイムをとり、學ぶことのために惜しげもなくそを費すのです。この一事のみにても敬愛の情をさ、けず居られませぬ。八時よりはじめ十時に終りてより、それからまだ働く人もあるとのことおばあさんの角を折るのが御寺とすれば、アメリカはまことに書生の角を折る御寺でございます。わがまゝも高慢も是にいたりてはまた頭をあげ得ざるもの、堪忍の袋の底ぬけては、今日主義の意久地なき失望者となるべく、急に破れては亂暴狼

籍なるものとなりて始末にこまる事なるべし。そのほころびのきれぬやうに慰撫し獎勵いたしたいものであります。

寺小屋の二階には四ツ、下には三ツのルームありて、ベッドの數合せて十數個、わが友は二階を、

吾は、下を監督して寄宿舎をやつて居るのです、その日その日さだめなき勞働に出づるもあり、あ

るは鋸引を十時間なせしと云ふあり、あるは園丁となりて花香を衣巾にとめてかへるもあり、ある

はキャンデー屋に働きて夜の十二時ごろかへり來るもあり、酒屋の掃除人となれるあり、一週十弗

以上の金をつくらんとするには、とても勉強などするタイムを得られぬのでございませぬ、土曜の夜

のみはまことに重荷下したらん心地して、得も云はれぬたのしみありと、人ごとくに云ふのをさく、

ひそかに涙をこぼしました。

國にありて指折り數へて飯り來るをまてる人、慈愛温かき親もあらん、友愛うるはしき友もあらん

兄とたよる弟妹もあらん、清き想を纏綿せしむる戀人もあらん、いまの苦境は成功の山の半腹には

相違なきも、愛する人の心からは荒き風の黒髪を吹くだに憎ましきに、波濤つねにやまぬ人生の沖に、今霄も一孤舟をあやつりてはなれ小島にこぎよせし心、身その境にあるよりも、遠く想ふ方は胸くるしきこととございませう。

厨房には老夫婦すみて朝はこの國ぶり、晝と夜とは純然たる日本食をしつらひ、廉價にてやどれる人々に供給してゐます。

狭けれど庭には百草千草の花さきみだれ、會堂の花瓶には日ごとに露帯びたるまゝ、挿まれて、供養

のため、ろを表はしてゐます。應接の間にはわがためのベッドありて、たゞむと筆筒のやうに見ゆるものが、裝飾の一つとして是に置き上に書籍の

あらんかぎりならべて置きます。

午前は長松となり午後三時半ごろよりは學童の友となり、八時よりは青年の友となり、いつも十一

時近くなりて漸く眠ることにしてゐます。

午後のはじめのタイムにてどこの白人の家庭に通ひ今すこしく勉強したひと思ふてゐます。寺小屋の先生となりて、自分の學業を等閑にするは本

意ではありませぬ。

されど病軀の勞働いと骨につらく、よしや學業にもせよこの上休養のタイムを削ること、壽命を削るの愚に近いのでありますから、長松と寺小屋の過渡時代は、ほど近き湖畔にでもそゝるゐるさして、一陣の涼風に萬事を閑却しやうと思ふてゐます川柳に曰く先生と云はるゝほどの馬鹿でなしと、鈍子變じて先生となる、彌々阿蒙のミイラが出来あがることでございませう。自ら祝して曰く御目出たいかなと、

(丁)

▲古昔歐羅巴では結婚した時から三十日間は蜂蜜で製した一種の飲料を用ゐねばならぬ事にして居た。そこで此卅日間即ち一ヶ月をハネムーン(蜜の月)と云ふことになつたとの事で遂には今日歐米に行はるゝ結婚旅行と變つたのだ。

▲先頃米國は紐育の一新聞紙は下の如き事を計算した。曰く同市にては平均六分毎に出産、七分毎に葬式、十時毎に入殺し、一時間毎に新建築、四十五分毎に出火、ある勘定なりと、

雜 錄

●少女の富士登山 大阪なる吉弘某の女政子(九才)が富士登山の報新聞紙に傳へらるゝや彼處にも此處にも之を真似るもの續出し中には十一二才の少女をして單身箱根地方を旅行せしむるものさへあるに至れり、左に記するも其一なり。
本郷區の六十一出版業杉本勝二郎氏の長女君子(十一)と云ふは目下、駿坂私立習性小學校高等二年生の少女の身ながら暑中休暇を利用して單身箱根、大磯地方を旅行して紀行文を作らんと志ざし兩親の途中を築じ危むを強ひて許しを請ひ金十圓を懐中にして新橋驛を出發したるは去る九日午前八時二十分の事なりし、兩親は出發の間際にのぞみて宿に泊る時は知らぬ人などには相談せず必ず其土地の駐在所に行きて巡查に宿の周旋を頼むがよしと呉れん、も教へたるに君子は能く其意を領したりと見え一昨日兩親の許へ届きたる二通の葉書には左の如き文言を認めありたり